

# 美大の中のフランス文学 –『美女と野獣』をめぐる–

French Literature in Bidai : Around *Beauty and the Beast*

青柳りさ

AOYAGI Risa

## はじめに

『美女と野獣』が18世紀フランス文学の作品であることは、文学を専門にしている者にとっては言うまでもないことだが、一方でディズニーのアニメだと思っている人たちもかなり多い。今年、ディズニー版の新しい実写版の『美女と野獣』(2017)<sup>1</sup>が封切られたのを機に、学生たちに、映画版としては最も古い、ジャン・コクトー<sup>2</sup>による『美女と野獣』(1946)<sup>3</sup>と、ポーモン夫人<sup>4</sup>(1757)、ヴィルヌーヴ夫人<sup>5</sup>(1740)による原作を紹介した。

実際、ほとんどの学生が、フランスの話だとは知らなかったようである。しかし、寄せられた映画の感想は、「オープニングの工夫が面白いと思った。(黒板を消しながらのクレジット)」、「セットの手作り感が良かった。一つ一つこだわって作ってあると思った。映画全体の雰囲気や小道具が絵本を見ているようだった」、「当然ながらCGなんてこの時代はあるはずもなく、野獣やその他もろもろの表現をどうやってするのかなんて思っていたけど、こうまとめるのか〜と思った。燭台を持っている手が一番、おって思った」、「スローモーションや動く床など、演出がたくさんあって映像的に面白く、衣装が白黒でもとても美しく揺れて、カラーでも見るのができたらいいなと思った。髪型が変化したり、爪がのびたり、本当に面白かった」、「モノクロの画面なのにとっても美しく作られていると思った。モノクロだからこそその明暗の美しさが計算されていたように思う」、「光と影のコントラスト、セットの作り込みや野獣のビジュアルなどがよかった」、「楽しいシー

ンで恐ろしい音楽、今から野獣の城に行くシーンで楽しい音楽でちょっと面白い」等々、美大生らしく興味深い<sup>6</sup>。

## 起源

映画『美女と野獣』は、ポーモン夫人の作品を底本としている<sup>7</sup>。30ページほどの作品で、彼女が編集する『こどもの雑誌』(*Magasin des Enfants*)に1757年に掲載された。しかし、『美女と野獣』というタイトルが初めて現れるのは、その17年前(1740年)、ヴィルヌーヴ夫人による長編小説『若いアメリカ娘と海の物語』(*La jeune américaine et les contes marins*)のなかの挿話としてである。ポーモン夫人の『美女と野獣』はこれを短縮したものとも言える。ヴィルヌーヴ版の方はほぼ200ページの大人のための物語である<sup>8</sup>。

この物語のさらに古いヴァージョンは、16世紀イタリアにおいて、スタパローラ<sup>9</sup>によって収集された昔話、『笑夜譚』(*Le Piacevoli Notti*)のなかの『豚の王』(*Il Re Porco*)とされている。この話は17世紀にドーノワ夫人<sup>10</sup>によって『豚の王』(*Prince Marcassin*)としてフランス語に翻案されている。

あるいは実話に基づいているという説もある。16世紀にスペインで生まれ、アンリ2世の宮廷に献上された多毛症の男、ペドロ・ゴンザレス<sup>11</sup>がモデルとなっているという説である。ペドロはその後、王に庇護され、カトリーヌという美しい妻をめとり7人の子供をもうけたということである。

異類婚姻譚という観点から、『美女と野獣』の原点

は2世紀、ギリシャ神話のクピドーとプシュケーの物語<sup>12</sup>まで遡るとする説もある。

ボーモン夫人の『こどもの雑誌』初版には挿絵はなかったようだが、その後の1843年版<sup>13</sup>、1859年版<sup>14</sup>、1883年版<sup>15</sup>には挿絵が入っている。また英国におけるウォルター・クレイン<sup>16</sup>による彩色木版画(1874)<sup>17</sup>もよく知られている。英国版のクレインの野獣のみ二足歩行であるが、いずれも野獣は人とは程遠い動物の姿で描かれている。ほぼ同じ時代に日本でも、伏姫と八房の物語(『南総里見八犬伝』(1814-1842))が展開していたことが思い起こされる。



Th. Guéran (1843)



G. Staal (1883)



Walter Crane (1874)

ボーモン夫人版以降では、『グリム童話』の初版(1812)に美女と野獣の物語である『夏の庭と冬の庭』が収録されている。3ページほどの短い話だが、これは『グリム童話』決定稿からは削除されることになる。

21世紀の映画から紀元2世紀まで『美女と野獣』の起源をあらあらと遡ってみたが、ボーモン版以降、オペラ、舞台、バレエ、映画、テレビ等々、『美女と野獣』から派生する作品は数かぎりない。



Telory (1859)

## « Va où je vais le Magnifique! Va! Va! Va! » (私の行くところへ、行け、行け、行け、マニフィーク!)

フランス語の授業で習った言葉が時々出てきてわかった時、嬉しかった。

所々フランス語が聞き取れて嬉しかった。

「質問」、「聞く」、「ありがとう」など、知っている単語が聞けたのでよかった。

聞き取れる単語が少しあったのでよかった。

聞き取れる単語が増えていて驚いた。

一部分だけだけど聞き取れるフランス語があって楽しかった。「Va, va, Magnifique!」とか。

フランス語、少しだけ聞き取れたような…。

フランス語は字幕があるから意味はわかるけれど、聞いたただけだと、怒っているのか冗談を言って笑っているのかなどは判別できないと思った。

聞き取れるフランス語がちらほらあって面白かった。日本語だとそうなるのかと。

ベルが城に帰ってきて野獣に「しっかりして、あなたは強靱な人でしょ」と「人」と呼んでいたところが好きだ。

Les mains qui bougent toutes seules étaient magnifiques mais ça me fait peur en même temps. J'aimerais bien revoir ce DVD. Merci beaucoup de nous donner la chance de le regarder. T.K.

フランス語のクラスで鑑賞してもらったので、フランス語についてもコメントがあった。「聞き取れた」というものから、日本人の耳には「怒っているのか冗談を言って笑っているのかなどは判別できない」という実際に聞いてみないとわからない感覚もある。フランス人の話ぶりについては普段の授業ではなかなか伝えられないことの一つである。

「日本語だとそうなるのか」という感想もあったが、フランス語が日本語にどのように翻訳されるかを意識できたことも面白い。一方で、「ベルが城に帰ってきて野獣に「しっかりして、あなたは強靱な人でしょ」と「人」と呼んでいたところが好きだ」とあったが、これは残念ながらフランス語では「あなたは強い爪を持っているのだから、その爪をしっ

かり生命にひっかけて」<sup>18</sup>とっており、それを翻訳者が「強靱な人」としたようである。「ベルが毒舌だ」、「ベルもたいがいなのでは」と感想を書いてくれた学生もいたことを鑑みると、この場面でベルの言葉をそのまま訳したのでは、おそらく日本人の心情に合わないという配慮があったのかもしれない。

## 音楽

音がぶちぶち切れるのと、状況にあってない音楽に醜さを感じた。

楽しいシーンで恐ろしい音楽、今から野獣の城に行くシーンで楽しい音楽でちょっと面白い。

音楽を担当したのはジョルジュ・オーリック<sup>19</sup>である。『美女と野獣』で、カンヌ映画祭音楽賞(1946)を受賞している。代表的な映画音楽に、『自由を我等に』(1931)、『美女と野獣』(1946)、『赤い風車(ムーラン・ルージュ)』(1952)、『ローマの休日』(1953)、『悲しみよこんにちは』(1958)などがある。「フランスス六人組」<sup>20</sup>の一人であり、アヴァンギャルドの一員とみなされた。映画音楽と並行して芸術音楽(オーケストラ、室内楽、バレエ音楽等)の作曲も続け、1962年にパリ・オペラ座の音楽監督に就任している。

エリック・サティ、ストラヴィンスキーらの影響を受け、コクトー映像制作を機に映画音楽の作曲を始めていることから、従来の音楽とは異なっていて然りである。「状況にあっていない音楽に醜さを感じた」という感想も、「ちょっと面白い」という感想も、それぞれに理由のあることのように見える。

## 野獣と鏡獅子

野獣のビジュアルなどがよかった。

アニメ版や最近のリメイク版だと野獣の姿が格好よくなってしまっているが、1946年版のものはもちろんCGなどなくつくりものの顔なので醜さが出ていてよかった。

当然ながらCGなんてこの時代はあるはずもなく、野獣やその他もろもろの表現をどうやってするのかなって思っ



いたけど、こうまとめるのか〜と思った。  
ギシクに時代を感じた…。CGもないのにどうやって野獣を表現するのかと思ったら思ったより人間で笑いました(笑)でも仕草が可愛かった。  
特に野獣の衣装が好きだ。  
Beastの肩パッドが当たったら痛そう。  
野獣の特殊メイクよくやったなあと…。毛のモフモフ感が可愛かった。  
当時最新だったであろう合成技術+特殊メイクが駆使されていてすごいな〜と思った。

「アニメ版や最近のリメイク版だと野獣の姿が格好よくなってしまっているが、1946年版のものはもちろんCGなどなくつくりものの顔なので醜さが出ていてよかった」とあるが、19世紀の野獣のビジュアルについて先に紹介したように、20世紀に入って、これでも随分「格好よく？」になっていると言えるかもしれない。

西川正也は、野獣のメイクは、コクトーが1936年に来日したときに観た歌舞伎の隈取りに発想を得たものであることは日本のコクトーファンの間で半ば定説となっていること、野獣の館を満たしている静かに張りつめた空気や、ほとんど台詞のない展開などが『鏡獅子』の舞台と共通することを指摘しつつも、その典拠は明らかにはなっていないとしている<sup>21</sup>。画像を並べてみると、メイクのみならず衣装にも相関性が伺える。



六代目菊五郎による『鏡獅子』<sup>22</sup>



映画『美女と野獣』より

堀口大學は、「『美女と野獣』の構想は、歌舞伎座で見た『鏡獅子』にその発想を得たものだと、のちにコクトー自身が種明かしをしている」<sup>23</sup>と記している。

戦前の日本にやってくるコクトーが、戦後すぐの1946年という時代に、敵国であり敗戦国である日本の歌舞伎を参考に『美女と野獣』を製作していたことになる。ただし、その典拠は示せないと西川も言っているように、このことは、本国フランスではほとんど注目されていないようである。『美女と野獣』のコクトーによる制作日記である『美女と野獣 ある映画の日記』<sup>24</sup>においても歌舞伎からの影響については一切触れられていない。

### 「フェルメールの作品に漂う雰囲気」

セットの手作り感が良かった。一つ一つこだわって作ってあると思った。映画全体の雰囲気や小道具が絵本を見ているようだった。

今とは違って白黒で趣があって美しかった。

白黒映画は初めて見たがとても良かった。色がついている映画とはまた違った雰囲気が感じられた。

映画の中の光が美しく息をのむ部分が多くあった。静寂が映えるなあと感じる。

スローモーションや動く床など、演出がたくさんあって映像的に面白く、衣装が白黒でもとても美しく揺れて、カラーでも見ることができたらいいなと思った。髪型が変化したり、爪がのびたり、本当に面白かった。

モノクロの画面なのにとっても美しく作られていると思った。モノクロだからこそその明暗の美しさが計算されていたように思う。

小道具とか衣装も良い！

城の内装や衣装や装飾などとても魅力的で観ていて引き込まれた。特に野獣の衣装が好きだ。

特にお城のシーンがどの場面を切り取っても画面だなと思った。

光と影のコントラスト、セットの作り込みや野獣のビジュアルなどがよかった。

光が美しい映像だと思った。

鈴木豊は、1971年の『美女と野獣』の翻訳に付した解説のなかで、「コクトーがみずから手を下して『美女と野獣』の映画化を企だてたとき、とくにデル

フトのフェルメールの作品に漂うような雰囲気を生かすように、と注文をつけたといいますが(…)」<sup>25</sup>と述べている。映画の美術指導は、クリスチャン・ペラール<sup>26</sup>である。コクトーは、「フェルメールのスタイルとペローのお伽話の赤と金色の大判の本に収められているギュスターヴ・ドレの挿絵のスタイルとを結びつけること、彼(ペラール)はそれに奇跡的に成功している」<sup>27</sup>と日記に記している。父親が病にふせている部屋についても「部屋は無知な蛮人たちによって破壊されるフェルメールの作品のような光景を呈している」<sup>28</sup>と、あるいは、「映画の危険、それはレンブラントを見せようとしてロワベになってしまうこと。それよりはむしろ何もしないほうがよい。そうすればフェルメールが見えてくる」<sup>29</sup>と記している。なるほど、学生たちは、フェルメールの空気、静寂、光と影、部屋の調度、構図を映像から感じ取っているようである。

また、「衣装が白黒でもとても美しく揺れて、カラーでも見ることができたらいいなと思った」という感想もあったが、コクトー自身も「フランスがまだカラー映画という贅沢ができないのが残念。洗濯場の黒い雌鶏たちの中にベルが空の青のドレスの盛装で入っていくシーンは一つの奇跡だ」<sup>30</sup>と述懐している。

### 空を飛ぶ

ディズニーのストーリーと全然違った！ 二人が空を飛んだり…。

最後まで飛ぶとは…。

飛ぶし。

最後の空を飛んでいくシーンがとても素敵だった。

時々、なんで！？と驚くところがあって笑ってしまった。

驚きの超展開、ハッピーエンド(?)でよかった。色々コミどころもあったが面白かった。

古い映画というのはときどきぶっ飛ぶこともあって面白かった。

最後に二人が空を飛んでしまう場面については、私自身、初めてこの映画を見たとき驚いたし、今見てもやはり違和感を感じる。ある友人は、空を飛ぶシーンはヨーロッパの人々が日常的に目にする天井画に描かれた人物（神々）のイメージなのではないかと解説してくれた。このシーンにはそのような文化的背景もあるのかもしれない。

ところで、実は、二人が空を飛ぶというシーンは原作にはない。ポーモン版の「仙女が手にしていた杖をひと振りすると、この広間に集まっていたひとたちはみんな、王子の国へあっという間に運ばれてしまいました」<sup>31</sup>というくだりがこのシーンの元になっているように思われる。今では、アニメで（実写版でも）登場人物たちが空を飛んでも、私たちは何の違和感も感じない。しかし、それを1946年時点でCGなしの実写版でやってのけていたということは、映像における最先端の試みとも言えるかもしれない。そして、この二人が空を飛ぶ構図は、宮崎駿の『ハウルの動く城』（2004年）のハウルとソフィーの空中遊歩の構図を想起させる。

あるいは野獣が王子に変わって現れるシーンだが、これも原作では、「ベルが野獣の方を振り返るとベルの足元に横たわっていたのはアムールよりもっと美しい王子だった」（ポーモン版）<sup>32</sup>、「目を覚まして野獣の方を向くと愛しい謎の青年がいた」（ヴィルヌーヴ版）<sup>33</sup>、ということで、あっという間に変身して優雅に挨拶するという映画のシーンも、原作にはないコクトーのオリジナルである。これについても、『ハウルの動く城』の最後に、魔力によって「カブ」に変身させられていた王子が、ひらりと元の姿に戻り優雅にお辞儀をするシーンの仕草そのままである。



映画『美女と野獣』より



映画『ハウルの動く城』より  
(©2004 STUDIO GHIBLI・NDHMT)

そのようにして見ていくと、映画冒頭で姉たちが乗る人力の籠も原作には登場していない。これも、『ハウルの動く城』の中で「荒地の魔女」が乗る人力の籠と同じ仕様のものである。

空を飛ぶ、あっという間に変身して優雅にお辞儀をする、今見ればどこかで見た当たり前のような光景だが、映像のなかにこのようなシーンを取り入れたのはコクトーがおそらく最初だろう。そして宮崎駿がコクトーの『美女と野獣』を見ていないはずはない。18世紀の物語に、20世紀になってコクトーが加えた要素を、21世紀の映像の中に私たちは見ていることになる。





映画『美女と野獣』より



映画『ハウルの動く城』より  
(©2004 STUDIO GHIBLI・NDHMT)

のかとか知りたい。

「野獣が最初の時点からこんなに紳士的だったことに驚いた」、「アニメではもっと横暴で人の心を失っているような描き方をされているのに対して、今回の野獣は礼儀はわきまえているように感じた」、「野獣のベルに対する（出会った当初からの）ゾッコンぶり、ツンデレぶりはかわいいの一言に尽きる」、「ディズニーのアニメよりも優しくかわいいなと感じた」という感想、そして「野獣が何かの隠喩なのか知りたい」という問いは、ディズニー版が省略してしまった原作の主題に関わるものである。

『美女と野獣』は、英題では「Beauty and the Beast」だが、原題は「La Belle et la Bête」である。英語の「Beast」は、「獣、畜生、動物、(特に大きな)四足獣、ひどい人、いやな人」だが、フランス語の「Bête」は、名詞では「動物、獣、家畜、虫、獣のような人間」だが、形容詞では「愚かな、馬鹿な、軽率な」という意味があり<sup>34</sup>、むしろフランス人が日常に使っているのは形容詞の「bête」の方である。ポーモン夫人版から引用する。

## BeastとBête

ディズニーの『美女と野獣』とは印象もストーリーも違い驚いた。特に野獣が最初の時点からこんなに紳士的だったことに驚いた。アニメではもっと横暴で人の心を失っているような描き方をされているのに対して、今回の野獣は礼儀はわきまえているように感じた。(父親に娘を差し出せというあたりに野獣の部分があるのかもしれないが…)最初からベルへの好意を前面に押し出してくる野獣がとても新鮮に感じた。これはこれでかわいいなと思った。

「受け取ってください」黄金の鍵の訳に違和感があった…。野獣のベルに対する（出会った当初からの）ゾッコンぶり、ツンデレぶりはかわいいの一言に尽きる。野獣がはじめお父さんと出会った時も、バラでなければ…と慈悲を与えていたところも、ディズニーのアニメよりも優しくかわいいなと感じた。

魔法の仕組みがよくわからなかった。野獣が何かの隠喩な

「私を解く醜いと思っているんだろう？」

「たしかにそう思っています」ベルはこたえました。

「私は嘘をつけないので…。でもとてもいい方だと思います」

「その通りだ」怪物は言いました。「しかも醜いだけではない、知性もない。私は自分が「Bête」だということをよく知っている」<sup>35</sup>

この「Bête」は、村松役では「愚かな」<sup>36</sup>、鈴木訳では「バカな」<sup>37</sup>とされている。王子が魔法によって奪われているのは美しさと知性の二つなのである。王子にかけられた魔法をとくには、美しさと知性なしで、ただその性格の良さのみで、美しい娘が野獣(王子)との結婚を承諾しなければならない。ポーモン版では、その対極として、ベルが城へ行っているあいだに、上の姉は美貌の貴族と、下の姉は才気煥発の男と結婚し、夫たちの容貌自慢、才気自慢の

せいで二人ともひどく不幸になっている。

一方、野獣を形容するのは「bon, bonne, bonté」という語で、30頁ほどの作品の10箇所でも用いられている。日本語に直せば「いい人」ということになる。「受け取ってください」黄金の鍵の訳に違和感があった…」というコメントがあったが、この申し出も、それほどまでに相手を信じているという証であり、野獣はほとんど「いい人(?)」なのである。城へ戻る前にベルは「ひとりの女を幸せにするのは夫の容貌でも才気でもなく、性格のよさと美徳と心遣いで、野獣さんはその全てを兼ね備えているのに」<sup>38</sup>と独白している。『こどもの雑誌』に掲載された『美女と野獣』は、美しさや知性よりも美徳が大切であるという教訓譚なのである。

### 『美女と野獣』、4つのヴァージョン

ディズニーの『美女と野獣』とかなり違って面白かった。前に本屋で『美女と野獣』の原作を立読みしたことがあるが、この映画はそれに基づいているのかなと思う。

ディズニーと全然違いますね。驚きの超展開、ハッピーエンド(?)でよかった。色々ツッコミどころもあったが面白かった。

ディズニーのストーリーと全然違った！二人が空を飛んだり…。キスで魔法が解けるのではないのですね。個人的にはディズニーのストーリーの方が好きだ。ちょっと面白かった。

ディズニーのアニメ映画と比べると怖い雰囲気だと感じた。ディズニーの『美女と野獣』とは印象もストーリーも違い驚いた。

ディズニーのそれと内容が違って面白いと思った。長回しでゆったり描かれていることもあり、ディズニーのミュージカルの歌って楽しい感じとまた違った大人な雰囲気ですごく話が進んでいくところが興味深かった。

自分の知っているストーリーと違って面白かった。美女の手から水を飲むシーンが綺麗だった。お屋敷の中がちょっと怖かった。

2014年のフランス・ドイツ合作で製作された『美女と野獣』のストーリーに似ていた。シーンとシーンの間の切れぐあ

いが昔の映画だなと感じさせる。無音のシーンが多くあるが場合によっては緊迫感が出ていいなと思った。でも無音が続きすぎると思うところもあった。ディズニーの映画よりも猟奇的というかワイルド感のあるシーンが多かった。本当はこちらがストーリーとして主流なんだろうと思うと、ディズニーの脚本はかなり美化されたものだなと思う。全体の雰囲気がアメリカのディズニー版と異なりおもしろかった。

ジャン・コクトーの『美女と野獣』は今回初めて見た。ディズニー版のキャラクターがすでに刷り込まれているためか、やはり所々で「？」と思いながら見ていた。

英語版とフランス語版の最も大きな違いは「Beast」と「Bête」の違いだったが、4つのヴァージョンを比較してみると、他にも見えてくるものがある。

ヴィルヌーヴ版では、男6人女6人の12人兄妹で、兄たちはベルを可愛がるが姉たちは疎んじている。野獣の城で、ベルは夜毎夢に現れる貴公子（じつは野獣に変えられた王子）に恋心を抱く。また、城には、小鳥や言葉を話せる鸚鵡やベルの世話をする猿たちがいて、ベルを楽しませる様々なエンタテインメントが用意されており、ベルはパリの街並みや、オペラ座のコンサート等々を城にいながら覗き見ることができる。コクトーの映画のなかで、旅立つ父親に姉たちがねだる「猿と鸚鵡」という一風変わった妙に具体的な土産や<sup>39</sup>、ベルが城から持ち帰った鏡に映る「猿」は、ヴィルヌーヴ版に登場する猿や鸚鵡が念頭にあったのかもしれない。また「美女の手から水を飲むシーンが綺麗だった」という映画を見ての感想があったが、これもヴィルヌーヴ版に、父親のもとから城へ戻ったベルが、死にかけている野獣を見つけて「両手で水を掬いその水をかけようとするがほんの少ししか運べない」というシーンがある。ヴィルヌーヴ版では野獣はベルに単刀直入に「一緒に寝させて欲しい」<sup>40</sup>と言う。姉たちのその後はわからない。

ボーモン版は、男3人女3人の6人兄妹、城には野獣以外の生き物はいない。ベルが野獣の城へ出発するとき、姉たちが玉ねぎで嘘の涙を流すというエ



ピソードが、コクトー版の、ベルが城に戻ろうとするのをひきとめようと玉ねぎを使って涙を流す場面に用いられる。半死の状態の野獣に水を汲んで顔にかけるといったシーンはボーモン版にもある。野獣はベルに「妻になってくれないか？」<sup>41</sup>と問う。姉たちは最後は意識を保ったままの状態に石に変えられてしまう。ヴィルヌーヴ版、ボーモン版、いずれも妖精譚であり、兄たちはベルを愛しむが、コクトー版のアヴナンやディズニー版のガストンにあたるような恋敵(?)に相当する人物は登場しない。

コクトー版は、兄1人姉2人とアヴナン、城にはベルの世話をする手(ベルはこの手を「目に見えない手(les mains invisibles)」と呼んでいる)と、静かに顔と目を動かさず(人によって演じられる)人像柱がある。野獣はベルに「妻になってくれないか？」と問う。これはボーモン版と同じ科白である。「黄金の鍵」のエピソードはコクトーのオリジナルである。アヴナンと野獣と王子の一人三役については、野獣役では顔は見えないし、王子役だと最後の一瞬しか登場できない、ということで稀代の美男子であるジャン・マレーを目一杯登場させるための苦肉の策だろう。

ディズニー版では、姉二人とガストンである。ベルの世話をし、ベルの気持ちを慰めるのは鸚鵡や猿ではなく言葉を喋り歌って踊るポットやカップや燭台や時計や筆筒になっている。

様々な比較検討が可能だが、見逃せない大きな違いは、ヴィルヌーヴ版とディズニー版が、楽しさと暖かさの感じられる明るいファンタジーであるのに対し、ボーモン版とコクトー版は暗く寒い恐ろしいファンタジーとなっていることである。なかでもコクトーの演出を際立たせるのは「燭台をもつ手」だろう。

## 燭台を持つ手

父親が野獣の屋敷に入った場面がすごく怖かった。最初の手が蠟燭を持って案内しているシーンがとても良かった。

腕の燭台の演出もすごいなんか憧れた。

ランプを持っている手が一番、おって思った。

ディズニーのアニメ映画と比べると怖い雰囲気だと感じた。彫刻が人間で動いたりするのが面白かった。

また城の装飾をどうするんだろうと思っていたが、まさか人の腕で驚いた。これもディズニーとの大きな違いですね…。

胸像役の人が色々とかわいそう。あとキャンドルもつ役も。お屋敷の中がちょっと怖かった。

城内の装飾や衣装や装飾などとても魅力的で観ていて引き込まれた。特に野獣の衣装が好きだ。

特にお城のシーンがどの場面を切り取っても画面だなと思った。

ファンタジーというより怪しいアナログ感ある美術が逆に不気味さを増していると思う。動く彫刻を人間が演じているのがすごい奇妙な空気を出している。『ロバと王女』<sup>42</sup>を思い出す<sup>43</sup>。ストーリーというより映像で感覚に訴えてくる感じがする。

お城のデザインが素敵だった。手で動いている感じがこわかった。

Les mains qui bougent toutes seules étaient magnifiques mais ça me fait peur en meme temps.

父親が誰もいない城に入ると、人の腕が次から次へと燭台の明かりを差し出す。テーブルの上の手がワインを注ぐ。そして人像柱が気づかれることなく人の動きを見守っている。その人像柱の顔も人が演じている。予想外であり不気味である。一気に恐ろしい物語の世界にひきこまれる。

先に、「フェルメールのスタイルとペローのお伽話の赤と金色の大判の本に収められているギュスターヴ・ドレの挿絵のスタイルとを結びつけること、彼(ペラー)はそれに奇跡的に成功している」<sup>44</sup>というコクトーの日記を引用したが、父親の田舎の家にはフェルメールの空気が、そして城にはギュスターヴ・ドレの怪しげな空気が漂う。



映画『美女と野獣』より



『ロバの皮』(1867)<sup>46</sup>



映画『美女と野獣』より



「ガルガンチュアの食事」(1873)<sup>47</sup>



『眠れる森の美女』(1862)<sup>45</sup>



『眠れる森の美女』(1862)<sup>48</sup>



ディアヌの館に至っては僕の期待をはるかに超えていた。これはまさしくペローのイメージによるギュスターヴ・ドレそのものだ。(例えば王子が眠れる森の美女の城の近くにやってきたところ。)<sup>49</sup>

暖炉の火が勢いよく燃えており、時計が鳴る。テーブルには食器類、水差し、ギュスターヴ・ドレ風のグラス類が並んでいる。全てが禍々しきすれすれの佇まい。<sup>50</sup>

芝居や映画でも、いま仕事をしているこのベルの部屋のセットほど僕の心に叶った部屋はこれまで見たことがない。[...] ヴェールの壁、一面の茂みを通して、形の定かではない風景全体がそれとなく見分けられる。敷物は本物の草、置かれている品々は、ギュスターヴ・ドレの壮麗な悪趣味風。<sup>51</sup>

鈴木豊は、1971年の文庫版の解説において、「ほかの文化はともかく、童話については北国の方が南国よりずっと優れている。南国のあまりに明るすぎる開放的な風土のもとでは、想像力が制限され、幻想が育つ余地がないが、一方北国の、峻烈な、暗い国々こそ、仙女や妖精が活躍する童話の世界である」とするポール・アザールの説<sup>52</sup>を引用しつつ、ポーモン夫人の物語をペローの童話と対照させて北方の童話に位置付ける<sup>53</sup>。

なるほど、ヴィルヌーヴ版は明るい。ポーモン版は暗く幻想的である。コクトーの演出は、「原作以上にファンタジックな世界として映像化した」<sup>54</sup>と解説される。ヴィルヌーヴ版を読んでいないはずはないコクトーが、映画冒頭に「ルブラン・ド・ポーモン夫人のコントによる (d'après le conte de Mme Leprince de Beaumont)」としたのも、なるほど、その表現したい世界観によるのだろう。

## 結び

最後に、だからと言ってヴィルヌーヴ版が排除されているわけではない、ということをつけ加えておきたい。猿や鸚鵡といった小道具や、泉の水を掬う

というシーンの関連性については先に触れたが、じつは、「人が演じる人像柱」と「燭台をもつ手」というコクトー版の最も印象的なシーンについても、ヴィルヌーヴ版にその端緒が隠されている。これらはポーモン版にはないものである。父親が初めて城を訪れる場面をヴィルヌーヴ版から引用する。

広大で豪勢なその建物には、彫像以外に住人はいないようでした。<sup>55</sup>

「彫像以外に住人はいないようでした」という言葉をそのままに、コクトーは、その彫像を、ただし、人に演じさせる。さらに、父親がベルをともなって城へ近づく場面では、ありとあらゆる打ち上げ花火がふたりを歓迎する。

ふたりが到着すると、花火が終わりました。花火に代わって立ち現れたのは、手に松明を灯したいくつもの彫像でした。<sup>56</sup>

ヴィルヌーヴ版の、「手に松明を灯したいくつもの彫像」は、開放的な城の外で二人を迎える。一方、コクトー版では、城の暗い閉じられた空間のなかで、「燭台をもつ人の手」となって、父親を、ついで一人で城を訪れるベルを導く。1946年のカンヌ映画祭では、「燭台のフェスティバル (C'est un festival de chandeliers)」というマドレーヌ・ソローニュ<sup>57</sup>が発した言葉が人口に膾炙した<sup>58</sup>とフィガロ紙に掲載されるほどに、この燭台の演出は驚きをもって受け入れられた。幻想的な燭台のシーンの裏側には、明るく豪勢なヴィルヌーヴ版があり、そのヴィルヌーヴ版の描写をそのままくると反転させて、コクトーの『美女と野獣』のファンタスティックな世界は構築されていくのである。

## 学生の感想

知っている設定とかなり違って面白かった。フランス語の授業で習った言葉が時々出てきてわかった時、嬉し



かった。アメリカ映画の『美女と野獣』より奥が深いと思った。ディズニーの『美女と野獣』とかなり違って面白かった。所々フランス語が聞き取れて嬉しかった。時々、なんで!?!と驚くところがあって笑ってしまった。

モノクロ映画は初めてきちんと見た。前に本屋で『美女と野獣』の原作を立読みしたことがあるが、この映画はそれに基づいているのかなと思う。1946年には頑張っていたと思う。最後、野獣と男の人が入れ替わったのはびっくりした。

アニメ版や最近のリメイク版だと野獣の姿が格好よくなってしまっているが、1946年版のものはもちろんCGなどなくつくりものの顔なので醜さが出ていてよかった。フランス語は字幕があるから意味はわかるけれど聞いただけだと、怒っているのか冗談を言って笑っているのかなどは判別できないと思った。アヴナン格好いい。

聞き取れる単語が増えていて驚いた。

父親が野獣の屋敷に入った場面がすごく怖かった。昔の技術だとつぎはぎが大変だったからか、一つの場面が長かった。「質問」、「聞く」、「ありがとう」など、知っている単語が聞けたのでよかった。

途中はただただベルちゃんがかわいそう…。ディズニーと全然違いますね。驚きの超展開、ハッピーエンド(?)でよかった。色々ツッコミどころもあったが面白かった。

オープニングの工夫が面白いと思った。(黒板を消しながらのクレジット)。野獣の登場の仕方が残念だった。もう少し時間をかけて出てきてほしかった。野獣の手から煙が出るという設定を知らなかったのでなんでなのかと思った。全体的に一番重要そうなシーンが一瞬で終わってしまうという印象だった。やっぱりフランスと日本の感覚が違うのか。

ベルの野獣に対する感情が結局何だったのかわからないままに終わってしまったのがとてもモヤモヤする。最後はお互い愛し合って終わっただけにとても心残り。

色々腑に落ちないところ(アヴナンの死、神殿の財宝、家族のその後)には目をつぶって(だからこそちにリメイクされる余裕が残っているのかも)、二人が幸せで、特に野獣が報われてほっとした。時代設定や服飾などもとても新鮮だ。初めて『美女と野獣』を見たが、最初がこれでよかった。

ディズニーのストーリーと全然違った! 二人が空を飛んだり…。キスで魔法が解けるのではないのですね。個人的にはディズニーのストーリーの方が好きだ。ちょっと面白かった。

セットの手作り感が良かった。一つ一つこだわって作ってあると思った。知っている文や単語が出てくると嬉しい。映画全体の雰囲気や小道具が絵本を見ているようだった。野獣が最初けっこうほんとに怖かった。ハッピーエンドだったしおもしろかった。アヴナン嫌いだけどさすがにちょっとかわいそう。ベルは「野獣は好きだけど愛じゃない」って言ってたけど、どこで愛になったの? 美しくなったからOKってことなの? と思ってしまった。

4年くらい前に多分これのリメイク版を見た。たぶん今まで私が見た中で一番古い映画だった(1960年代が前)。なかなかのぶっ飛びファンタジーで面白かった。

『美女と野獣』はアニメを小さい時に見たことがあったけれどあまり覚えていなかったので今日見て面白かったので良かった。今とは違って白黒で趣があって美しかった。最後の空を飛んでいくシーンがとても素敵だった。

最初の手が蠟燭を持って案内しているシーンがとても良かった。白黒映画は初めて見たがとても良かった。色がついている映画とはまた違った雰囲気が感じられた。

初めのベルの兄や姉や父の生活のだからださに驚いた。映画の中の光が美しく息をのむ部分が多くあった。静寂が映えるなあと感じる。はじめの野獣がほんとに気持ち悪かったけどベルの優しさでこっちはなんとかなった。腕の燭台の演出もすごいしなんか憧れた。破産したらこうなるんだって思った部分もある。「受け取ってください」黄金の鍵の訳に違和感があった…。コンプレックスが愛しさに変わる瞬間、愛だなあ…と感じる、でも愛ではないらしい…。姉達の方がよっぽど野獣じゃねえか…。アヴナンたち、姉たちの都合の良さ、利己心などは子どもの駄々のようなもの、不幸によって誰かが幸せになることを終始匂わせるというか、そういう感性も伺えた。

古い映画というのはときどきぶっ飛ぶこともあって面白かった。幸せならいいです。

当然ながらCGなんてこの時代はあるはずもなく、野獣やその他もろもろの表現をどうやってするのかなって思っ

いたけど、こうまとめるのかーと思った。ランプを持っている手が一番、おって思った。

スローモーションや動く床など、演出がたくさんあって映像的に面白く、衣装が白黒でもとても美しく揺れて、カラーでも見るのができたらいいなと思った。髪型が変化したり、爪がのびたり、本当に面白かった。

モノクロの画面なのにとっても美しく作られていると思った。モノクロだからこそその明暗の美しさが計算されていたように思う。ハッピーエンドでよかったがアヴナンが少しかわいそうに思った。

ディズニーのアニメ映画と比べると怖い雰囲気だと感じた。ベル役の人、とても美人だと思った。ほとんどカットもしないで長く回しているシーンが多くてすごいと思った。このあいだ上映していた『ビューティー・アンド・ザ・ビースト』より好きだった。小道具とか衣装も良い！

彫刻が人間で動いたりするのが面白かった。白黒映画で粗い画質だから変なところが目立たなかったんだと思った。音がぶちぶち切れるのと状況にあってない音楽に醜さを感じた。あとベルがあんまりかわいくないこと。

ディズニーの『美女と野獣』とは印象もストーリーも違い驚いた。特に野獣が最初の時点からこんなに紳士だったことに驚いた。アニメではもっと横暴で人の心を失っているような描き方をされているのに対して、今回の野獣は礼儀はわきまえているように感じた。(父親に娘を差し出せというあたりに野獣の部分があるのかもしれないが…) 最初からベルへの好意を前面に押し出してくる野獣がとても新鮮に感じた。これはこれでかわいいなと思った。ストーリーはディズニーの方の『美女と野獣』が好きだが、城の内装や衣装や装飾などとても魅力的で観ていて引き込まれた。特に野獣の衣装が好きだ。兄姉もたいがいだなと思って観ていたがベルもたいがいなのはと最後まで観て思った。

『美女と野獣』を見るのが初めてだからか、冒頭シーンがよくわからなかった。贈物をもらって野獣に気を許したのか許していないのかよくわからなかった。途中でベルが目の中の悲しみ、優しさと言っていたのが、ベルが野獣に気を許した理由でしょうか…？ 矢に打たれて野獣の姿になったのは欲にまみれたからでしょうか？ (宝の部屋に落ちる時) 最終的に心の優しい野獣とベルが幸せそうな感

じになってよかった。

画面酔いしました。すみません。ディズニーのそれと内容が違って面白いと思った。この映画は画面が揺れていることが多い、手持ちカメラか？ 映像が古いからよけい目立つのかもしれない。

野獣のベルに対する(出会った当初からの)ゾクゾクぶり、ツンデレぶりはかわいいの一言に尽きる。野獣がはじめお父さんと出会った時もバラでなければ…と慈悲を与えていたところも、ディズニーのアニメよりも優しくかわいいなと感じた。全体的にカットが長い印象だった。長回しでゆったり描かれていることもあり、ディズニーのミュージカルの歌って楽しい感じとまた違った大人な雰囲気の話が進んでいくところが興味深かった。また城の装飾をどうするんだろうと思っていたが、まさか人の腕で驚いた。これもディズニーとの大きな違いですね…。ベルが城に帰ってきて野獣に「しっかりして、あなたは強靱な人でしょ」と「人」と呼んでいたところが好きだ。最後まさか飛ぶとは…。

Beastが意外と細身だった。楽しいシーンで恐ろしい音楽、今から野獣の城に行くシーンで楽しい音楽でちょっと面白い。Beastの肩パッドが当たったら痛そう。胸像役の人が色々とかわいそう。あとキャンドルもつ役も。話がちょいちょい端折られてて難しいところがあった。

自分の知っているストーリーと違って面白かった。

聞き取れる単語が少しあったのでよかった。初めて観たのでとても興味深かった。

この終わり方が良かったのかわからないが馬鹿にしていた姉たちがバッドエンドになって良かった(?) 魔法の仕組みがよくわからなかった。野獣が何かの隠喩なのかとか知りたい。

美女の手から水を飲むシーンが綺麗だった。お屋敷の中がちょっと怖かった。

特にお城のシーンがどの場面を切り取っても画面だなと思った。野獣が交代制? 顔面交代制なのが意外すぎて驚いた。

一部分だけだけど聞き取れるフランス語があって楽しかった。「Va, va, Magnifique!」とか。ただストーリーは少し笑えた(笑)。初めて観たのでまさかこういうストーリーだと思わなかった。ベルの心情が複雑で理解が難しかっ

た。女優がすごく綺麗でもう見てて楽しかった。ファンタジーというより怪しいアナログ感ある美術が逆に不気味さを増してると思う。動く彫刻を人間が演じているのがすごい奇妙な空気を出している。『ロバと王女』を思い出す。ストーリーというより映像で感覚に訴えてくる感じがする。

フランス語少しだけ聞き取れたような…。話の飛躍すごい。野獣の特殊メイクよくやったなあ…。毛のモフモフ感が可愛かった。お城のデザインが素敵だった。手で動いている感じがこわかった。

ギシクに時代を感じた…。CGもないのにどうやって野獣を表現するのかと思ったら思ったより人間で笑いました(笑)でも仕草が可愛かった。

ラスト5分がものすごい展開でびっくりした。ベルの話方が好き。

姉たちが終始嫌なやつで胸くそ悪いと思って見ていた。最後の終わり方もアヴナンはどうなったとか、身代わりとか、しっくりこなかった。ただベルが毒舌でよかった。

最後に野獣とベルの兄の友人の姿が入り替わっていたのが不思議だった。

一人二役。

話の展開が最後の方が特にはやくてびっくりした。

2014年のフランス・ドイツ合作で製作された『美女と野獣』のストーリーに似ていた。シーンとシーンの間の切れぐあいがあるが昔の映画だなと感じさせる。無音のシーンが多くあるが場合によっては緊迫感が出ていいなと思った。でも無音が続きすぎると思うところもあった。ディズニーの映画よりも猟奇的というかワイルド感のあるシーンが多かった。本当はこちらがストーリーとして主流なんだろうと思うと、ディズニーの脚本はかなり美化されたものだなと思う。聞き取れるフランス語がちらほらあって面白かった。日本語だとそうなるのかと。

急展開すぎて終盤ジェットコースターだった。当時最新だったであろう合成技術+特殊メイクが駆使されていてすごいな~と思った。飛ぶし。

全体の雰囲気がアメリカのディズニー版と異なりおもしろかった。最初のイントロが興味深い文句で始まっていた。ジャン・コクトーの『美女と野獣』は今回初めて見た。ディ

ズニー版のキャラクターがすでに刷り込まれているためか、やはり所々で「？」と思いながら見ていた。ただこの作品では二人を取り巻くロマンティックな情緒を描写することに重点が置かれているためか、そのロマンティックな演出が時に迂遠で、まわりくどくて、じれったさを感じながら見ていた。野獣に気がないベルのはずが野獣を避けるでもなくデートしたり(散歩)、「好きにはなれない」と堂々と言ったり…それは好きではない相手にする行動ではないよな~と思った。ジャン・コクトーは人物たちに愛について会話をさせたかったのだろうと思うが、脚本と出来事が直接的で、人物の状況や考えていること、感じていることを、もっと丁寧に表現してほしいと思った。最後にベルがアヴナンを愛していたことがわかったがそのアヴナンからの求婚を断り続けていた理由なども映してほしいかった。ジャン・コクトーは何がしたかったのでしょうか？

光と影のコントラスト、セットの作り込みや野獣のビジュアルなどがよかった。終盤の怒涛の展開が面白かった。光が美しい映像だと思った。

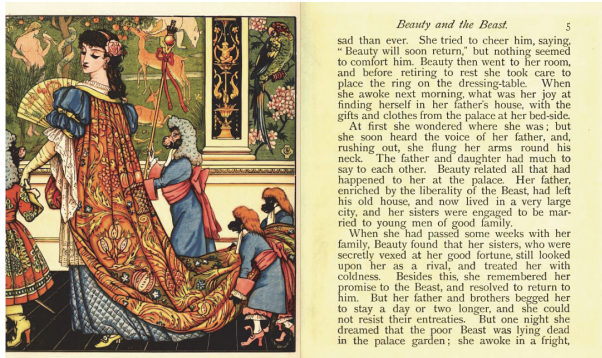
Les mains qui bougent toutes seules étaient magnifiques mais ça me fait peur en meme temps. J'aimerais bien revoir ce DVD. Merci beaucoup de nous donner la chance de le regarder. T.K.

## 註

- 『美女と野獣』(Beauty and the Beast) 2017年 アメリカ映画 監督 ビル・コンドン
- Jean Cocteau (1889-1963)
- 『美女と野獣』(La Belle et la Bête) 1946年 フランス映画 監督 ジャン・コクトー (Classic movies collection)
- Jeanne-Marie Leprince de Beaumont (1711-1780)
- Gabrielle-Suzanne de Villeneuve (1695-1755)
- 映画鑑賞後、A6サイズのカードを配り、学生に感想を求めた。古い映画でテンポもゆっくりなので、どの程度興味をもってもらえるか不安もあったが、予想以上に的確で面白い感想や質問がよせられた。学生たちの感想・質問に応えながら映画を読み解いていくというのがこの文章の主眼である。
- 映画冒頭に「ルブラン・ド・ボーモン夫人のコントによる (d'après le conte de Mme Leprince de Beaumont)」と紹介される。



- 8 Jeanne-Marie Leprince de Beaumont, *La Belle et la Bête in Le Cabinet des fées, ou collection choisie des contes des fées, et autres contes merveilleux, ornés de figures*, 35, 1786 (Slatkine, Genève, 1978) pp.12-40 ; Gabrielle-Suzanne de Villeneuve, *La Belle et la Bête in Le Cabinet des fées, ou collection choisie des contes des fées, et autres contes merveilleux, ornés de figures*, 26, Barde-Genève, Cuchet-Paris 1785-1786 (Slatkine, Genève, 1978) pp.27-214.
- 9 Giovanni Francesco Staparola (1480-1558)
- 10 Marie-Catherine d'Aulnoy (1650-1705)
- 11 Pedro Gonzales (1537-1618)
- 12 アブレウス／呉茂一訳『黄金のろば』岩波文庫上巻1956年。17世紀にラ・フォンテーヌがこの挿話から『プシュケーとクピドの愛』を書き、以降、舞台、バレエ、絵画の流行のテーマとなっていく。
- 13 Leprince de Beaumont, *Le Magasin des enfants*, illustrations de Th. Guérin, Paris, Charles Warée, 1843, p.60.
- 14 Leprince de Beaumont, *Le Magasin des enfants*, 120 dessins par Telory, Paris, Delarue, 1859, p.41.
- 15 Leprince de Beaumont, *Le Magasin des enfants*, illustrations de G. Staal, Paris, Garnier Frère, 1883, p.50.
- 16 Walter Crane (1845-1915)
- 17 Leprince de Beaumont / Walter Crane, *Beauty and the Beast*, London, New-York, Georges Routledge and Sons, 1875, pp.5-6. (URL:<https://archive.org/details/beautybeast00cra> 2017.11.6)
- 1875年に英国で刊行された英語版『美女と野獣』（ポーモン夫人）にはウォルター・クレインによる挿絵が付されている。ここにはベルのお付きの猿たちが描かれているが、ポーモン版には猿が登場するようなシーンはない。ベルの侍従役や世話役をつとめる猿たちが登場するのはヴィルヌーヴ版の方である。どのような経緯でヴィルヌーヴ版に即した版画が制作されポーモン版の出版にあたって採用されたかについては改めて確認したい。



- 18 «Je connais vos griffes puissantes, accrochez-les dans la vie.» (映画『美女と野獣』より)
- 19 Georges Auric (1899-1983)
- 20 «Groupe des Six」1916年から1923年にかけて結成された作

曲家グループ。メンバーは、ルイ・デュレ、アルテュール・オネゲル、ダリウス・ミヨー。ジェルメース・タイユフェール、フランシス・プーランク、ジョルジュ・オーリック。エリック・サティやジャン・コクトーの影響を受け、ロマン派、印象主義音楽に抗する。

- 21 「『美女と野獣』における野獣のメイクアップは歌舞伎の隈取りから発想したものであるというのは日本のコクトーフアンの間では半ば定説となった意見であるが、詩人が日本において出会った『鏡獅子』や菊五郎の芸が、彼のその後の創作活動にどの程度の影響を与えることになったのかを特定することは実は困難な作業である。確かに映画『美女と野獣』に登場する野獣の顔は、隈取りを施した歌舞伎役者に似ていなくはないし、野獣の館を満たしている静かに張りつめた空気や、ほとんど台詞のない展開などは『鏡獅子』の舞台と共通するものであると言えるだろう。しかし野獣のメイクアップそのものは、実はコクトーの友人であった舞台美術家・クリスチャン・ベラルと主演俳優のジャン・マレーとが苦心の末に完成させたものであり、そこに歌舞伎の影響を読み取ることはそれほど容易ではない。堀口の言葉に従えば、両者の関連について言及したコクトー自身の証言があるのかもしれないが、筆者にはその典拠はこれまでのところ明らかになっていない」(西川正也『コクトー1936年の日本を歩く』中央公論社2004年 p.63)
- 22 音羽屋 尾上菊五郎／菊之助 オフィシャルサイト (URL: <http://otowaya.ne.jp/jp/ancestors/a04.html> 2017.11.6)
- 23 「コクトーは忘れなかった、十年後に彼が製作し、ルイ・デリュック賞まで受けた映画の傑作『美女と野獣』の構想は、あの時歌舞伎座で、旅の行きずりに見て行った『鏡獅子』に、その発想を得たものだと、のちに種明かしをしている」(堀口大學『堀口大學全集』第6巻「思い出のコクトー」小沢書店1982年 p.572)
- 24 ジャン・コクトー／秋山和夫訳『美女と野獣 ある映画の日記』筑摩書房1991年 (Jean Cocteau, *La Belle et la Bête, Journal d'un film*, J.B.Janin, 1946)
- 25 「コクトーがみずから手を下して『美女と野獣』の映画化を企てたとき、とくにデルフトのフェルメールの作品に漂うような雰囲気を生かすように、と注文をつけたといいますが、確かにポーモン夫人の「仙女物語」は、こうしたフランスの童話と同日には語れないむしろ北方的な童話といえることができます」(ポーモン夫人／鈴木豊訳『美女と野獣』角川文庫1971年 解説 p.262)
- 26 Christian Bérard (1902-1949)
- 27 ジャン・コクトー／秋山和夫訳『美女と野獣 ある映画の日記』Op.cit. p.12.
- 28 *Ibid.*, p.106.
- 29 *Ibid.*, p.124.
- 30 *Ibid.*, p.36.
- 31 «Dans le moment, la fée donna un coup de baguette qui

- transporta tous ceux qui étaient dans cette salle, dans le royaume du prince.» (Beaumont, *op.cit.*, p.38)
- 32 «À peine la Belle eut-elle prononcé ces paroles, qu'elle vit le château brillant de lumière ; les feux d'artifices, la musique, tout lui annonçait une fête ; mais toutes ces beautés n'arrêtèrent point sa vue : elle se retourna vers sa chère Bête, dont le danger la faisait frémir. Quelle fut sa surprise ! la Bête avait disparu, et elle ne vit plus à ses pieds qu'un prince plus beau que l'Amour, qui la remerciait d'avoir fini son enchantement.» (*Ibid.*, p.38)
- 33 « Le soir en se couchant, elle s'étoit mise au bord de son lit, ne croyant pas faire trop de place à son afferuex époux. Il avoit ronflé d'abord, mais elle avoit cessé de l'entendre avant que de s'endormir. Le silence qu'il gardoit quand elle s'éveilla, lui ayant fait douter qu'il fût auprès d'elle, & s'imaginant qu'il s'étoit levé doucement; pour en savoir la vérité, elle se retourna avec le plus de précaution qu'il lui fut possible, & fut agréablement surprise de trouver au lieu de la Bête son cher inconnu.» (Villeneuve, *op.cit.*, p.123)
- 34 「Elle a l'air bête. (彼女は見るからに頭が弱そうだ) : C'est un roman bête. (くだらない小説だ) ; J'étais bête de refuser sa proposition. (彼の申し出を断るなんて馬鹿だった)」『仏和大辞典』白水社 1988年 pp.255-256.
- 35 « Dites-moi, n'est-ce pas que vous me trouvez bien laid ? — Cela est vrai, dit la Belle, car je ne sais pas mentir ; mais je crois que vous êtes fort bon. — Vous avez raison, dit le monstre, mais, outre que je suis laid, je n'ai point d'esprit : je sais bien que je ne suis qu'une Bête.» (Beaumont, *op.cit.*, p.29)
- 36 ボーモン夫人／村松潔訳『美女と野獣』新潮文庫 2017年 p.46.
- 37 ボーモン夫人／鈴木豊訳『美女と野獣』角川文庫 1971年 p.21.
- 38 «Ce n'est ni la beauté, ni l'esprit d'un mari qui rendent une femme contente : c'est la bonté du caractère, la vertu, la complaisance ; et la Bête a toutes ces bonnes qualités.» (*Op.cit.*, p.36)
- 39 «Un singe, je voudrais un singe, un perroquet ! » (映画『美女と野獣』より)
- 40 «Elle lui demanda sans détour si elle vouloit la laisser coucher avec elle.» (Villeneuve, *op.cit.*, p.75)
- 41 «La Belle, voulez-vous être ma femme ?» (Beaumont, *op.cit.*, p.30)
- 42 映画『ロバと王女 (*Peau d'Ane*)』(1970) ジャック・ドゥミ監督、カトリーヌ・ドヌーヴ、ジャン・マレー主演。原作は、シャルル・ペローの童話『ロバの皮』(1694)、グリム童話『千匹皮』(1812)も同種の物語である。アヴナンと野獣と王子の三役を演じたジャン・マレーが主演していること、魔法の鏡、王女の部屋のベルの部屋との類似、登場人物の動きを追う人が演じる人像柱、スローモーションやリバーズモーションといった撮影技法の使用等、コクトーの『美女と野獣』にちなんだ要素が数多く存在していることが分析されている。(Rodney Hill, «*Donkey Skin (Peau d'âne)*», *Film Quartely*, vol.59, no.2 (Winter 2005-2006), pp. 40-44)
- 43 Jean-Vavril Slukaは『ロバと王女』を『美女と野獣』へのオマージュとしている。(Critique du film, 2014, <http://www.dvdclassik.com/critique/peau-d-ane-demy> 2017.11.6)
- 44 ジャン・コクトー／秋山和夫訳『美女と野獣 ある映画の日記』*Op.cit.*, p.12.
- 45 Bnf, «Gustave Doré, Les Contes de Perrault» (<http://expositions.bnf.fr/orsay-gustavedore/albums/contes/index.htm> 2017.11.6)
- 46 Pinterest, «Gustave Doré *Peau d'Ane*, conte en vers de Charels Perrault» (<https://www.pinterest.fr/tranquilvitalit/gustave-dore/> 2017.11.6)
- 47 Elèves créateur, «Décrire une scène gargantuesque, le repas de Gargantua» ([http://www.weblettres.net/blogs/article.php?w=Elevescreateur&e\\_id=58171](http://www.weblettres.net/blogs/article.php?w=Elevescreateur&e_id=58171) 2017.11.6)
- 48 Larousse, «Gustave Doré, illustration pour *la Belle au bois dormant*» ([http://www.larousse.fr/encyclopedie/images/Gustave\\_Dor%C3%A9\\_illustration\\_pour\\_la\\_Belle\\_au\\_bois\\_dormant\\_/1311145](http://www.larousse.fr/encyclopedie/images/Gustave_Dor%C3%A9_illustration_pour_la_Belle_au_bois_dormant_/1311145) 2017.11.6)
- 49 ジャン・コクトー／秋山和夫訳『美女と野獣 ある映画の日記』*Op.cit.*, p.159.
- 50 *Ibid.*, p.182.
- 51 *Ibid.*, p.198.
- 52 Paul Hazard, *Les livres, les enfants et les hommes*, Hatier, 1967, p.99.
- 53 鈴木はその背景に、ボーモン夫人の気質、ロンドンで生活し執筆活動を行ったこと、革命前の不安定な社会情勢等があったことを指摘している。(Op.cit., pp.259-265)
- 54 『美女と野獣』Classic movies collection DVD 2009 帯評より。
- 55 «Ce vaste & magnifique édifice ne paroissoit être habité que par des statues.» (Villeneuve, *op.cit.*, p.41)
- 56 «Au moment qu'ils y furent, le feu d'artifice cessa. Sa lumière fut remplacée par toutes les statues, lesquelles avoient dans leurs mains des flambeaux allumés.» (*Ibid.*, p. 60)
- 57 Madeleine Sologne (1912-1995)
- 58 *Le Figaro* du 6 octobre 1946.
- (あおやぎ・りさ 一般教育等／フランス文学)  
(2017年11月7日 受理)